（2020 年 11 月 11 日放送）

第 2 回：歴史・文化・特徴、十七氏族、十七氏にまつわる史跡

辻堂村の歴史・文化・特徴を紹介したいと思います。

戦国時代には小田原北条氏、または後北条氏と称され有名な北条早雲（出家前は伊勢新九郎長氏）の一族が 5 代 100 年余辻堂村を支配しました。本拠地は小田原で「小田原所領役帳」によると、永禄 2 年(1559)に辻堂は羽鳥と合わせ、御馬廻衆(騎馬の武士で、大将の馬の周囲に付き添い護衛や伝令及び兵力として用いられた武家の職制のひとつ)関兵部丞の知行地でした。文書には五拾弐貫四百拾二文と記述されています。

江戸時代の辻堂村の石高は 265 石程度です。江戸時代初めは徳川氏の直接支配を受けていましたが、元和年間(1615-23)になると旗本 保々氏、八木氏の二人の旗本の采地となり、保々氏が 165 石を賜り、八木氏が 100 石を賜っていました。元禄 10 年(1697)には八木氏の分 100 石が高木氏・森川氏・戸田氏三人に均等に分けられました。3 人は元禄 10 年(1697)に実施された「元禄地方(じかた)直し」の対象とされたもので、それまでの俸給制から知行主・地頭となる旗本救済の珍しい制度です。しかし 65 年後の宝暦 12 年(1762)には、辻堂は全て幕府の御料地となり、代官 伊奈半左衛門の支配に移されました。以降、明治維新までの 100 年余、御料地として継続する稀有な例となりました。

これは 34 年前の享保 13 年(1728)から辻堂海岸が片瀬山等と共に幕府の砲術調練場とされていたからと云えます。この射撃訓練を実施した調錬場の存在が労働力の負担や農民の生活に多くの影響を及ぼしました。明治になると鵠沼から茅ヶ崎まであった海岸地区の砲術調練場は辻堂の部分だけ海軍演習場として買収されました。日露戦争前頃に兵隊が村人の家へ宿泊する民宿では泊まり賃は良い現金収入となったようで最盛期には、100 軒ほどにもなったと云います。約 2 軒に 1 軒の割です。海軍演習場は戦後、連合軍に接収され射撃演習や上陸演習場とされました。

江戸時代の当地の名物に「松露(しょうろ)・初茸(はつたけ)」や「防風」があります。「松露・初茸」は海辺の防風林の松林に生えたキノコです。「松露」は飴玉位の大きさで春に発生し、吸い物にも美味しいものでした。「防風」は「浜防風」のことで、砂丘に春に生えるせり科の植物で、芳香があり、刺身のつまに珍重されました。また、この三品の砂糖漬けが藤沢名物となっていました。

米の生産は自給にも足りませんでしたが、畑作の甘藷は土壌が適し、大正時代今のメルシャン工場の所にあった大和(やまと)醸造にも使用され、また戦中戦後の食糧難には大変な威力を発揮しました。

近代の辻堂の大きな出来事の 1 つは住民が明治二十年に開通した東海道線の藤沢―茅ケ崎間に新駅開設を求める運動を起こし、資金や土地の提供などの苦難を乗り越えて全国的に類を見ない国鉄請願駅を大正 5 年(1916)12 月に実現したことが挙げられます。辻堂駅と名付けられ、当地の風光明媚や気候温暖を唱え、地域の繁栄を期待した開設記念碑が駅前に建っています。昭和の初期には湘南の名産と云われたモモが栽培され、辻堂駅から出荷されています。

© 2021 Fujisawa-Chimeinokai

辻堂駅新築落成祝賀会　新築落成せる辻堂停車場

藤沢市教育委員会 所蔵

辻堂村南部に特徴的な点として**十七氏族に関する話**があります。

この氏族が当地に入植した時期は「新編相模国風土記稿」や「皇国地誌」などの公式文書には記載されていないため不明です。鎌倉時代の建久年間(1190-99)に西国の平家の落武者が当地に移り住んだ、とか後北条時代に移住したのでは、との伝承があります。いずれにしろ、後北条時代中期には十七氏族が集落を当地に形成し、その比率は総戸数 80 戸の大半を占めていたと思われます。

江戸時代の村政を取り仕切る村方三役(名主・組頭・百姓代)はすべて十七氏族で占められ、江戸時代中期の 1700 年には総戸数 131 戸のうち 90 戸(69%)、明治初期の 1884 年には総戸数 180 戸のうち 162 戸(90%)を占め、当地での中核の存在感を今日まで示しています。

十七氏族は「四つ角」を中心に東町(ちょう)・西町(ちょう)・南町(ちょう)・北町(ちょう)に分かれて住み、稲荷社・道祖神・墓地を保有しました。それぞれの町別の史跡を紹介しましょう。稲荷社は東町に八松稲荷、西町に八森稲荷、南町に御霊稲荷社がありました。北町のお稲荷様については現在不明です。村の総鎮守である諏訪神社近隣の石井家庭内にある第六天碑は、元々、十七氏族の一つ南町の石井幸次郎氏の曽祖父石井徳右エ門氏が現在の消防署裏手にあった松山の頂に建て、昭和 45 年に現在地に移設されています。地元の地引網漁の守護神でした。辻堂小学校から旧日の出橋までの通称肥上げ道の両側に、松を植えた落合又五郎さんは文政年間(1818-30)に生まれ、明治 41 年(1908)に亡くなるまで暇さえあれば、何十年も生涯植林を続けた変人でしたが、後年、実業家が中心になって同氏の功績を讃えて「木又地蔵」という地蔵を引地川近くの交差点付近の祠に安置しています。落合氏も十七氏族の末裔ではないでしょうか。

© 2021 Fujisawa-Chimeinokai